

# アメリカ対日占領軍「CIE映画」

——教育とプロパガンダの境界——<sup>(1)</sup>

## (1) アメリカ対外文化戦略としての教育映画

土 屋 由 香

はじめに

「教育」と「プロパガンダ」、あるいは「娯楽」と「政治」の境界線は何処にあるのだろうか。これらの境界線が限りなくあやふやになった歴史的瞬間のひとつに、第二次世界大戦直後のアメリカ占領下諸地域における、教育ドキュメンタリー映画の上映があった。そのような映画はアメリカ占領下のドイツ、オーストリア、朝鮮半島などにおいても上映されたが、ここでは日本の場合を例にとってアメリカの対外文化・情報政策の一環としての映画について論じたい。アメリカ政府が新世代のソフトなプロパガンダとして用意した映画を、日本のある人々は文化的向上のための啓蒙教育とみなし、別の人々は最高の娯楽と受けとった。実際、米軍が上映した教育ドキュメンタリー映画は、プロパガンダ・教育・娯楽の要素をすべて含んでいた。この論文は、これらの映画に教育的側面や娯楽的側面があったことを全否定するものではない。むしろ、教育とプロパガンダ、娯楽と政治との間に、流動的なグレ

イゾーンが存在したという仮説に基づき、アメリカの戦後対外文化政策の文脈からこれらの映画の政治性を分析することを目的とする。

第二次世界大戦後、アメリカ対日占領軍は四百本以上の「教育映画」(シヨート・ドキュメンタリーと呼ばれることもあった)を日本人に見せた。これらの映画のテーマは、アメリカの文化・風物から衛生・国際問題まで多岐にわたった。映画は都市部のみならず、農村・漁村や果ては捕鯨船上でまで上映された。アメリカ陸軍は「ナトコ(Natco)」「シカゴ」の映写機製造会社、ナシヨナル・カンパニー(National Company)の略称)と呼ばれる一六ミリフィルム映写機を千三百台、占領軍に供与した。占領軍の教育映画が日本人の間で「ナトコ映画」と呼ばれるようになった所以である。しかしこの論文では、占領軍が最も普通に用いていた用語、「CIE(教育)映画」を用いることにする。CIEとは、教育映画を担当していた占領軍の部局、民間情報教育局(Civil Information and Education Section)の略称である。CIEは全都道府県に「視聴覚ライブラリー」の設置を義務付け、そこにナトコ映写機と映画を配備した。ナトコ映写機は、時に日本人の間で親しみを込めて「ナト子ちゃん」などと呼ばれながら、各都道府県の隅々まで巡回してCIE映画を普及させて行ったのである。(写真1-3)

CIE映画は、戦前すでに映画が庶民の娯楽として定着していた大都市では比較的影の薄い存在であったものの、娯楽の少ない農山漁村では熱烈な歓迎を受けた。およそ二千あった映画館のうち「六六パーセントは六大都市に集中」し、「映画館のない町村は九〇パーセントに達」という状況の下、これは極めて自然なことであった。<sup>(2)</sup>しかし都会においても、劇場で娯楽映画とセットで上映されたケースもあったので、人々はそれがCIE映画だとは深く認識せずに娯楽映画の「前座」として楽しんだ。

各都道府県が提出したデータをもとに占領軍が作成した一九五一年七月までの観客動員数統計によると、延べ九

億四千五百万人がCIE映画を見ており、この数字はまだ増え続けていた。この時点で公開されていた三三〇作品のうち、七三作品（約二二パーセント）は五百万人以上、うち一八作品は七百万人以上の観客動員数を記録した。延べ観客数の中には、占領軍の兵士やその家族も含まれていたと考えられる。しかし、その数を差し引いたとしても、一九五〇年の日本の人口が約八千三百万人であるから、単純に計算すればすべての日本人が一人当たり一〇本程度のCIE映画を見たことになる。この統計は都道府県からの自主申告に基づいているため、必ずしも正確なものではないかも知れないが、上映状況は占領軍の地方軍政部も注意深く監視していたので、極端に誇張された数字とも言えないだろう。いずれにしても、CIE映画が一般の娯楽映画よりもはるかに高い頻度で見られていたことは確かだ。<sup>(3)</sup>

このようなCIE映画に対する評価は様々である。上映に直接携わった日本人の手記などにおいては、日本の一特に農村の—文化的向上に貢献した貴重な啓蒙手段であったことが強調される傾向がある。ちなみにこれは、当時の文部官僚の見解でもあった。<sup>(4)</sup> CIE映画についての学問的研究は未だ決して多くないが、主として教育学の立場からはCIE映画が何らかの形で日本の教育の向上に役立ったという積極的評価が見られる。先駆的な例として阿部章の研究（一九八三年）が挙げられよう。阿部は教育制度史研究の立場から、CIE映画が日本の戦後社会教育・視聴覚教育の充実・発展に大きく貢献したことを、地方での上映状況に関する統計を駆使して論じた。<sup>(5)</sup> より近年では柴静子（二〇〇三年）が、戦後家庭科教育の成立過程において家庭問題を扱ったCIE映画が効果的に用いられたことを実証した。<sup>(6)</sup> 他方社会学では、中村秀之（二〇〇二年）が雑誌『映画教室』の記事分析を通して、日本の教育映画関係者がCIE映画に一定の評価を与えながらも、内容については様々な不満を持っていたことを指摘した。<sup>(7)</sup> これらの研究に対して、アメリカの対外文化政策の文脈でCIE映画をとらえた唯一の文献として谷川建司（二〇

〇二年)の研究がある。谷川は占領期の映画政策全般を扱った大著の一部において、アメリカ政府の対外映画政策発展史の中にCIE映画を位置付けた。そこには戦争中のアメリカ対外情報宣伝政策から占領期CIE映画への人的・思想的な連続性を認めることができる。<sup>(8)</sup>このような先行研究を踏まえ、CIE映画が同時に教育的でもあり政治的でもありえた背景を探ることは、今後の議論にひとつの視角を提供するという点でも意味のあることだと考える。

前編である本稿では、まず谷川が米國務省資料に基づいて実証したアメリカ対外情報宣伝政策の戦中から戦後への連続性を、二つの枠組みを用いて補足・補強する。そのひとつは戦前から戦後へのアメリカ・ニューディール芸術家の思想的系譜、もうひとつは対外情報宣伝の重要性を飛躍的に高めた「文化冷戦」である。次に、実際に占領軍がCIE映画にどのように取り組んだのかを、占領軍の資料に基づいて考察する。全体を通して明らかにするのは、CIE映画がいかにアメリカ合衆国の世界規模の文化・情報戦略の中に深く位置付けられていたかということである。なお後編では、実際のCIE映画の分析と、日本人のCIE映画への関わりについての考察を通して、CIE映画が持つ教育性・娯楽性・政治性の相互関係について論じる予定である。

## 一 CIE映画の起源—アメリカ対外情報宣伝政策の流れ

占領地域の国民に大量の教育映画を見せるという計画は、第二次世界大戦中のアメリカ政府のプロバガンダ政策に起源を發し、冷戦の到来とともに飛躍的に發展した。それは、映画だけではなくあらゆるメディアを使ってアメリカという国家のイメージを世界に伝える文化・情報戦略の一環であった。

第二次大戦中、現在の中央情報局（CIA）の前身である戦略局（OSS）となり、重要な情報宣伝機関として一九四二年に設立されたのが戦時情報局（OWI）であった。OWIには、国内および海外向けプロパガンダに用いるポスター・映画・パンフレット等を作成するために、多くの芸術家や文筆家が集められた。その多くは戦前、ニューディール政策の一環として推進されたフェデラル・ワン（Federal One）出身の、左翼芸術家たちであった。フェデラル・ワンとは、第二次ニューディールのうちWPA（Works Progress Administration）と呼ばれた公共投資政策の一部で、作家・音楽家・芸術家・俳優などに財政援助を与えたものである。ここで活躍した芸術家の多くが、一九三〇年代後半にカルチュラル・フロントと呼ばれる左翼芸術運動を展開し、芸術を通して民主的で平等なアメリカ社会を実現するという理想を追求した。<sup>(9)</sup>戦争が始まると、このような左翼芸術運動はアメリカ政府によって弾圧されるが、皮肉にもニューディール芸術家たちの多くは、政府情報機関であるOWIに活路を見出す。総力戦体制の下、戦前にかかげた民主的で平等なアメリカ社会建設の理想を、もはや国内の社会改革に向けることはできなかつた。かわりに彼らは、対外的にはそのような理想をアメリカ文化の「優位性」として宣伝し、対内的にはそのような理想を理解しないドイツや日本と全力で戦うよう呼びかけた。<sup>(10)</sup>いわば「理想」は、生きた「目標」から戦争遂行のための「錦の御旗」へと変化したのだ。

OWIの映画課はハリウッド映画産業の積極的な協力を受けて戦争努力に役立つ映画を作らせ、またOWI独自のドキュメンタリー映画も製作した。OWI総裁エルマー・デイヴィス（Elmer Davis）は、「人々の心の中にプロパガンダ的な考え方を注入する最も簡単な方法というのは、彼らがプロパガンダに曝されると気がつかないうちに娯楽映画という媒体を通じて広めることである」と発言している。<sup>(11)</sup>このような「プロパガンダらしくないプロパガンダ」を重んじる傾向は、戦後のCIE映画にも一脈通じるものがある。一九四四年一二月には「極東におけ

るOWI製ドキュメンタリー及び商業映画配給のための作戦指針」と題する文書が作成された。これは戦後の「フィリピン、中国、満州、仏領インドシナ、タイ、台湾、日本、朝鮮、蘭領インド、ビルマ、マレーシア」における映画配給業務について詳細に提言したもので、OWIの対外宣伝活動が日本のみならず広くアジアを視野に入れたものであったことを示唆する。<sup>(12)</sup>

終戦に伴い、OWIは一九四五年八月三一日に廃止されたが、その仕事は国務省内に新たに設立された国際情報文化部(OIC)に引き継がれる。海外情報宣伝の仕事が国務省の下に一本化されたということは、CIE映画に關して言えば重要な意味を持っている。すなわち戦時の情報機関が行っていたプロパガンダ映画の仕事が、アメリカ外交の表の顔である国務省に吸収され、正式な対外政策の一部として機能し始めたからである。実はOWIが廃止される以前の一九四四年秋ごろから既に、OICの前身である国務省・国際情報部はOWIやOSSと連絡を取りつつ、戦後世界でアメリカが進めるべき情報宣伝政策について検討していた。対日情報政策についても一九四五年五月〜六月にかけて、国務省・OWI・OSSの三者が合同で会議を開き、各部署がこれまでに作成してきた案のすり合わせを行っている。それまで各部署で独自に検討されてきた戦後アメリカの対外情報宣伝政策が、戦末期に一本化されて行き、終戦とともにOICの下に統括されるに至ったという図式だ。<sup>(13)</sup>

一九四六年一月にはOIC内に国際映画部(IMP)が設立され、旧OWIのスタッフが多数配属される。IMPは設立から最初の六ヶ月の間に、以下の九本をCIE映画として日本へ輸出する。<sup>(14)</sup>

- (1) トスカニーニ (Hymn of the Nations)
- (2) よりよき明日 (A Better Tomorrow)
- (3) 選挙当日 (Tuesday in November)

- (4) 勉学の自由 (Freedom to Learn)
- (5) 米国北西州 (Northwest U. S. A.)
- (6) 電力と農園 (Power and Land)
- (7) 鋼の町 (Steel Town)
- (8) 飛来する疫病 (Winged Scourge)
- (9) 風を防ぐ樹木 (Trees to Tame the Wind)

これらは日本で公開されたCIE映画の最初の九本に当たる。筆者はこのうち(1)、(3)、(4)、(5)、(7)、(8)の六本を実際にアメリカ国立公文書館の映像課で見してきた。その結果(1)、(3)、(5)、(7)の四本はOWI製作作品であることが確認できた。この内(5)『米国北西州』と(7)『鋼の町』はどちらも、ニューデイル・WPA出身の名監督ウィラー・ヴァン・ダイク (Willard Van Dyke) の一九四四年作品であることがわかった。また、製作年は(1)、(5)、(7)が一九四四年、(3)が一九四五年と確認できた。(その他は不明。)

これらの初期CIE映画、とくにヴァン・ダイク作品には、ニューデイル時代の影響が色濃く認められる。例えば『鋼の町』は、鉄鋼業を中心とするアメリカの小さな町における労働者たちの生活を、明暗の美しい白黒映像で描いた作品である。異なる民族集団に属する労働者たちが協力して鉄鋼作りに励む様子や、労働者たちのつつましくも文化的に豊かな生活が描かれ、「人種・民族間の平等」や「労働者の権利」といった、カルチュラル・フロントの芸術家たちの理想を彷彿とさせる。しかし、この映画にはニューデイルの理想とは明らかに一線を画する政治観が含まれている。それは、良き労働者として白人と肩を並べて働く中近東からの移民が、実はキリスト教に改宗していて、丘の上の家で家族とクリスマスを祝うという設定や、労働者と経営者が仲良く話し合うことによつ

て生産力を向上させ戦争に貢献するという場面である。<sup>(15)</sup>白人文化への同化や労使協調によって国民が団結するといふ考えは、明らかにニューデイル左派の理念とは相容れないものである。ニューデイル出身の左派芸術家が、「人種の壁を越えた友情」や「労働者の気高さ」等、一九三〇年代と同じような題材を用いながらも、訴えるメッセージは戦時向き・OWI向きに微妙に変えていたことが示唆される。この映画が特に海外宣伝用に作られたものか、あるいはアメリカ人視聴者も想定したものであったのかは不明だ。しかしいづれにしても、アメリカという国は白人プロテスタント文化を中心に団結した国であり、人種・階級対立は無いという、虚偽のアメリカ像を観客に伝えてしまっているのである。そのようなメッセージをすべての視聴者が鵜呑みにしたとは考えられないが、安っぽいプロバガンダではなく名監督の手による質の高い映像であるだけに、見る者に訴えかける力は強かったのではないか。

ニューデイルの芸術家は、アメリカ民主主義と平等主義の理想に燃える、いわば愛国者の側面があったために、戦争が始まると人一倍、政府の戦争努力に協力することになった。このため彼らの関心は、理想の実現に向かつて闘うことから、実際にはあり得ないユートピア像を「これがアメリカだ」と内外に宣伝し、さらにはアメリカに敵対するドイツや日本をデイストピア（ユートピアの反対）と定義するようになって行ったのだと考えられる。

このように考えると、ニューデイル期にカルチュラル・フロントに属した詩人のアーチボルト・マクリーシユ（Archibald MacLeish）が、OWI勤務を経て戦争末期には国務次官補に就任し、ドイツ人や日本人の精神構造を根底から改革するための「再教育政策」を唱導したのも不自然なことではなかった。<sup>(16)</sup>マクリーシユの再教育論は主としてドイツに向けられていたが、彼の主張は日本占領政策にも間接的ながら重要な影響を及ぼすことになる。彼は、アメリカにはドイツを「占領し、警備し、その国民に食料を与えたり罰したりするだけではなく、彼らを改心させ、説得する義務がある」と確信していた。このため彼はドイツ降伏直後、「ドイツ再教育に関する特別委員会」



(Ad-hoc Committee on Re-education of Germany) を設置した。この委員会に、ドイツ再教育政策を日本にも応用すべく、国務省の日本専門家ゴードン・ボウルズ (Gordon Bowles) が送り込まれたのだ。<sup>(17)</sup>

ボウルズは後に対日教育政策に深く関与することになるが、本稿ではCIE映画に関連する役割だけに触れる。ボウルズは、日本の降伏直後に国務・陸軍・海軍三省調整委員会 (SWNCC) の下に結成された「日本の再方向付けに関する特別委員会」(Ad-hoc Committee on Re-orientation of Japan) のメンバーとして、対独政策での経験を日本に応用した。<sup>(18)</sup> この特別委員会には、国務省・国際情報文化部 (OIC) も参加していた。<sup>(19)</sup> 上述の通り、OICはOWIの仕事を引き継ぐために結成された組織である。したがって、マクラーシユの間接的な影響といい、OICの参加といい、この特別委員会はOWIからの思想的連続性を強く感じさせる。委員会の審議を通して、映画、ラジオ、新聞、雑誌、さらに学校教育までも用いて日本人を民主主義と親米思想に「再教育」することを定めた政策文書、SWNCC162シリーズ「日本人の再方向付け」が作成されたのは、OWIの情報宣伝の考え方を引き継いでいたからと見ることができるといえる。戦後計画の最高決定機関である国務・陸軍・海軍三省調整委員会によって採択されたSWNCC162シリーズは、後にCIE映画を担当した占領軍・民間情報教育局の情報宣伝活動の拠り所となった。<sup>(20)</sup>

まとめると、占領下の日本人に教育映画を見せるといふ計画は、戦争中のOWIの対外情報宣伝政策にその起源を発し、終戦とともに国務省に引き継がれ、初期のCIE映画に至った。戦中から戦後への連続性を端的に象徴したのは、OWIで活躍した元ニューデール映像芸術家の作品がCIE映画として日本へ送られたこと、また同じくOWI出身のマクラーシユ国務次官補の間接的影響力によって、メディアによる日本人再教育の方針が定められたことである。このように見えて来ると、広く信じられているニューデール・リベラル (または左翼) という等式は、アメリカ国内政治の文脈においては妥当であるにしても、対外政策の文脈では再考を迫られるのではないだ

ろうか。ともあれ、このようにして形成されてきたCIE映画計画に、間もなく冷戦という新たな要素が加わることになる。

## 二 「文化冷戦」とアメリカの対外情報宣伝政策

戦争の終結に伴い、戦争中に活発に行われた情報宣伝活動は表面上その使命を終えたかのように見えた。しかし間もなく冷戦の兆しが見え始めると、対外情報宣伝政策の重要性は再び高まって行った。米ソの対立は、政治・経済・軍事面での競争のみならず、自国の好ましいイメージを売り込むことによって他国民の「心」を射止めようとする「文化冷戦」(Cultural Cold War)でもあった。それを端的に示したのは、一九五九年モスクワで開催されたアメリカ博において、ニクソン副大統領とフルシチョフ首相の間で交わされた「台所論争」(Kitchen Debate)であった。ニクソンは最新式の洗濯機などが並ぶアメリカ中産階級のモデル・ハウスを披露しながら、様々な消費財を自由に選べるアメリカ式ライフ・スタイルがいかに便利で快適なものか、アメリカの家庭の主婦たちがいかに豊かで幸せな生活を送っているかを力説した。これに対してフルシチョフは、「ソビエトでは女性に対してそのような資本主義的な態度は取らない。」と応酬した。<sup>(21)</sup>(写真4)

自国の文化やライフ・スタイルをより優れたものとして世界に宣伝する、いわば文化の陣取り合戦の中で、アメリカ政府は雑誌や映画などの視覚メディアによる情報宣伝に益々期待をかけた。コロンビア大学のチャールズ・アイムストロングの言葉を借りれば、アメリカ政府はプロバガンダや洗脳に対する人間の「もろさ」について、「次第に関心を深め、ついには一種の信仰心を持つようになった」のである。そして、プロバガンダ戦の「武器」とし

て、映画は「特に優れたメディア」と考えられた<sup>(22)</sup>。

文化冷戦がいつ始まったのかという点について、定説は無い。トルーマン大統領がヨーロッパの反共勢力への財政支援を求めて、いわゆる「トルーマン・ドクトリン」を発表したのは一九四七年三月であるから、この頃からアメリカ政府は本格的にソビエトを意識した文化戦略に取り組んで行ったと考えられる。谷川の研究によれば、日本で公開されるソビエト映画と中国映画の取り扱いについて、一九四六年五月ごろ既に占領軍内部で議論されていた<sup>(23)</sup>。一九四八年に入ると、アメリカ陸軍民政部の「再教育課」(Reorientation Branch)はアメリカ映画協会(MP A)の全面的な協力を取り付け、ドイツ、オーストリア、日本、朝鮮半島の占領地域に本格的に情報宣伝映画を輸出し始めた。MP A副会長のフランシス・ハーモンによれば、戦後の新しい情報宣伝映画は「プロバガンダ」を避けて、「アメリカの日常生活や普通のアメリカ人の仕事、文化教育活動、女性の活動、民主主義的なシステムがうまく機能している様子」などを見せることが大切だった<sup>(24)</sup>。すなわち、アメリカの文化やライフ・スタイルを映像で売り込み、占領地域の人々の好感を勝ち取ることによって、国家のイメージを高めるという戦略であった。諸国民の「心と精神を射止めること」(Winning the hearts and minds)が、文化冷戦におけるアメリカの映画政策のキーワードとなった。

ただ、ここで指摘すべきは、アメリカの良いイメージを海外に売り込むという戦略は、文化冷戦によって初めて生まれたものではないということである。第一節で述べたとおり、そのような対外文化戦略はO W I時代から続いていたのであり、冷戦はただその内容を、明確にソビエトを意識したものに転換したに過ぎなかった。むしろこれは重要な変化ではあったが、映画を用いた対外文化戦略そのものには戦争中からの連続性があった。

注目に値することに、國務省・OWI・OSSの三者が対外宣伝政策のすり合わせを行っていた戦争中の一九四四年一月、アルバニア向けの宣伝映画に関して「活発に活動しているソ連に對抗する上でアメリカン・ウェイ・オブ・ライフを描いたプロパガンダ映画、もしくは娯楽映画が望まれる」という議論が、既に行われていた。<sup>(25)</sup> ソビエトとの対立が明確に意識化されるよりはるか前に、既に「文化冷戦」の芽が育っていたことを示す証左として、またアメリカのライフ・スタイルが既にプロパガンダの題材として重要視されていたことを物語るエピソードとして重要である。

### 二 占領軍・民間情報教育局(CIE)の教育映画ユニット

実際に日本占領が開始すると、SWNCC162シリーズに示された、様々なメディアを用いて民主主義の理想と親米感情を育てるという任務は、占領軍・CIEが担うことになった。組織は紆余曲折を経たが、一九四八年七月までにはCIE情報課(Information Division)の映画・演劇班(Motion Picture & Theatrical Branch)の中に設けられた教育映画ユニット(Educational Film Unit)がCIE映画を取り仕切るという形で落ち着いた。<sup>(26)</sup> CIE情報部には「映画・演劇班」の他にもラジオ班、新聞・出版班などが設けられ、それぞれ異なるメディアを通じた情報宣伝活動に従事した。これらはまとめて「メディア担当諸班」と呼ばれ、それらの任務は一九四八年六月の「政治情報教育プログラム」と題された文書に改めて明示された。それ以前にも情報教育プログラムは行われていたにも関わらず、この時期にこのような文書が改めて作成された背景には、文化冷戦が本格化し、それに合わせた情報宣伝活動を担当者たちに明確に理解させる必要があったからだろう。

CIE内部文書「政治情報教育プログラム」は、メディア担当諸班が一致協力して「日本人の間に存在する政治への冷笑的な態度を改め」、「日本社会に存在する全体主義的な要素を排除し」、「自由で民主的な国に住むことの利点を日本人に認識させる」ことに努めることを求めた。そのための具体策として、例えば映画・演劇班は(1)日本の映画製作者に対して、ある程度の政治教育の内容をもちながらも娯楽的な映画を作るのは可能だということを教える、(2)彼らに政治教育の題材を提供する、(3)政治教育に有効で時宜にかなったニュース・リールを頒布する、(4)アメリカその他の西側諸国で製作されたドキュメンタリー映画を上映・頒布する、(5)教育映画を全国で上映するために千台の一六ミリ映写機を頒布する、等の活動を行うことが定められた。同年一月になると、この文書をさらに拡充した「情報プログラム」と題する一五八ページの冊子が作成され、CIE情報宣伝活動の手引き書となった。<sup>(27)</sup>

これらの文書からも明らかのように、CIE映画は文化冷戦の中で日本人の心を西側ブロックにしっかりとつなぎとめておくための政治教育の手段と認識されていた。一九四八年の夏以降、占領軍によるCIE映画の活用が飛躍的に伸びたことは、前節で述べたように文化冷戦を背景として情報宣伝映画の重要性がますます高まったことを裏付けている。このような状況を見る限り、CIE映画を日本の教育制度の発展のために用いるという発想はまったく認められない。しかし後編で詳しく論じるように、CIE映画は占領軍と日本人との共同作業の側面があり、数十本の日本製CIE映画も製作される。また占領軍の他部局もそれぞれの目的でCIE映画を利用するようになる。そのような過程で、アメリカのライフ・スタイルを売り込むという当初の目的以外の要素もまた、入り込む余地が出て来るのである。

さて、一九四八年に設立されたCIE教育映画ユニットは、当初ドン・デューク (Donald W. Duke) と E・J・ヘネシー少佐 (Major E. J. Hennessy) の二人で出発したが、一九四九年には三人のスタッフが追加された。ユニッ

ト長のドン・デュークのCIE映画にかける熱意は並々ならぬものがあつた。CIE映画が占領軍にとつて重要なものであつたことの証左として、占領末期にCIEの機能が次第に縮小してゆく中、教育映画班は最後まで生き残つた。さらに占領終結後には、その活動は國務省の管轄の下、USIS (U. S. Information Service) 映画としてアメリカ大使館に引き継がれた。

ドン・デュークは生涯、情報宣伝映画一筋に生きた男だつた。(写真5) そのような人物がいること自体、アメリカの情報宣伝映画政策がいかに成熟・安定した分野であつたかということを物語っている。日本に来る前には、彼は海軍省の広報担当官および「ステージ・マネージャー」という職に就いていた。これが具体的にどのような仕事だつたのかは不明だが、おそらく海軍の製作する宣伝映画に関係してはいたのではないか。一九四七年七月に来日した時、彼はまだ三〇歳だつた。CIEでの任務を終えて一九五一年四月に帰国した後は國務省入りし、映画担当官としてバンコク(一九五四)、ボン(一九五六)に派遣された。その後、國務省TVサービス・製作部長(一九六〇)、國務省TVサービス・局長特別補佐官(一九六二)を歴任し、ナイジェリアのラゴス(一九六五)駐在を経て、ベトナム戦争中には駐サイゴンTV・映画担当官を務めた。<sup>(28)</sup> デュークの経歴を一見するだけで、アメリカの情報宣伝映画政策がいかに世界規模の広がりを持ったものだったかがわかる。タイ、ドイツ、ナイジェリア、ベトナムはいずれも文化冷戦におけるアメリカ情報宣伝政策の重要な拠点であつた。日本での経験は、デュークにとつてもアメリカ國務省にとつても、戦後宣伝映画政策の「原点」となつた。諸国民の心を映画によって操作できるという自信は、日本占領に「成功した」という思いから発していたのではないだろうか。

話を占領期に戻そう。アメリカ陸軍省のリオリエンテーション課・ニューヨーク・フィールド・オフィス (Department of the Army, Reorientation Branch, New York Field Office) は、政府・民間を問わず様々な所から映画

を集めて占領地域に送っていたほか、オリジナルの情報宣伝映画も製作していた。日本の場合、一九四六年七月から一九五〇年二月までの四年五ヶ月間だけで、ニューヨーク・ワールド・オフィスは五百本前後の映画を外部調達して占領軍CIE宛に送った。この五百本前後のリストには「陸軍省ニューヨーク・ワールド・オフィス製作映画は含まれていない」とあるので、陸軍省オリジナル作品を入れれば、日本に送られた映画の数はもつと多いはずだ。<sup>29</sup>このような手順を見ると、占領初期には国務省・国際映画部が担っていた教育映画を選定・輸出する役割が、その後陸軍省に移管していたことが伺えるが、その具体的経緯は現在のところまだわかっていない。

ともあれ、デュークたちは送られて来た映画一本一本をスクリーニングして、日本人の政治教育に役立ちそうなものをCIE映画に選定した。CIE映画に選ばれたフィルムは日本の映画会社に回され、そこで「アダプテーション」と呼ばれる一連の作業が行われた。すなわち日本語のナレーションが吹き込まれ、日本語のタイトルが付けられ、時にはフィルムの編集作業が行われた。「アダプテーション」は日本の業界にビジネス・チャンスを提供した。

デュークは会社同士の競争を利用して「アダプテーション」のコンテンツを行うなどして、仕事の質とスピードを高めた。<sup>30</sup>「アダプテーション」を経たフィルムは現像所に回され、日本全国のナトコ映写機で映写するために何十本もの一六ミリフィルム複製が作られた。一六ミリフィルムの焼付・現像技術をもつ会社は少なく、最終的には当時の東洋現像所（英語名 Far East Laboratory）一社が、CIE映画の現像の大部分を担当するようになった。

一九四八年の六月中にもアメリカから千三百台のナトコ映写機が届く予定だったので、デュークはフル回転で現像するよう東洋現像所に命じた。東洋現像所は一九四八、四九年の一年間に売り上げを四倍以上伸ばすことができ<sup>31</sup>たが、社員たちはCIEの要求を満たすために大変な苦勞をしなくてはならなかった。東洋現像所で営業を担当していたS氏にとって、デュークは「非常に怖い、忘れることのできない」人物だった。もし注文していたプリント

が少しでも遅れようものなら、デュークは怒ってS氏の上司にあたるU氏を呼び出し怒鳴りつけた。U氏は英語が堪能であったため、占領軍相手の渉外を一手に任されていたのである。<sup>(32)</sup>

S氏の話は、占領軍の残した会議記録によって裏付けることができる。デュークは几帳面な性格で、自分の行ったミーティングの記録をほとんど一言一句秘書にタイプさせた後、さらにそれを一ページに要約したレポートを作らせていた。一九四八年四月二〇日の記録によれば、デュークとヘネシーは、東洋現像所のU氏と会談し、二四時間ノンストップ操業するよう要請した。

デューク…これから六月一日までは日曜日も操業してもらいたい。一週七日・二四時間、一六ミリフィルムのプリントをして欲しいということだ。…一台のプリンターで一時間あたり六百フィートのプリントが出来るはずだが、遅れている理由は一体何かね？

U氏…電球（の不足）です。

デューク…電球が十分に供給されるとしたら（他に問題は）？

U氏…技術者たちの健康問題です。…人員不足のため、二四時間操業は難しいと考えます。

デューク…君は既に一週六日・二四時間操業をしていると私に言ったではないか。我々はただ、一週七日に延長するように頼んでいるだけだ。

ヘネシー…技術者の数をもっと増やしなさい。

U氏…あと二人来るはずですよ。

デューク…今すぐ増やすんだ。



U氏…予定を作成します。

デューク…今から六月一日までの間に、最大限だけ働けるかというプランを提出しなさい。明日、持つてくるのだ。<sup>(33)</sup>

東洋現像所は、デュークの期待に沿うために技術者の増員をはかった。一六ミリ現像技術者のTさんは、一九五一年三月三日に採用されたが、その翌日から一日おきに徹夜で働かされた。正月も働いたという。<sup>(34)</sup>東洋現像所の社史には、Tさんの記憶を裏付ける記述がある。

当時、この一六ミリの処理を担当していたのは一五名から二〇名くらいで、一週間に三回か四回は徹夜となつた。夜半の一二時に雑炊のような軽い夜食をとって、朝の六時まで仕事をする。仕事が終わってから本来の出勤時間である八時までの二時間、テーブルの上などで仮眠をとる。昭和二四年〜二五年のいちばん忙しいとき<sup>(35)</sup>というのは、こんな状態であつた。

当時S氏・T氏の同僚であつたI氏は、「今だから言えることですが…」と一人の技術者が過労死したことを話してくれた。「前の晩も徹夜してたんですから、あれは今から思えば一種の労働災害」だつたとI氏は考える。しかし労働組合も無く、占領軍の命令には絶対服従という状況の中で、公にされずに終わった。<sup>(36)</sup>東洋現像所にまつわる経緯は、占領軍が民主主義の理想を広めるのに強圧的な態度で臨んだという皮肉を、典型的に物語るエピソードであつた。また別の見方をすれば、占領軍にとってCIE映画がそれだけ緊急を要するほどの重要性を持つてい

たことも示している。

#### 四 CIE映画のリストについて

CIE映画の全リストについては、一九五三年版『USISフィルム・カタログ』が最も完全に近い形で網羅している。ただ、これは一九五三年に編纂されたリストであるため、占領終結後に日本に入ってきた映画も含まれており、逆に占領期にいったん公開されたものの役目を終えて引退した映画は含まれていないという難点がある。前述のとおり占領終結とともにCIE映画はUSIS映画と名称を変え、国務省の管轄の下、アメリカ大使館に保管されるようになったので、このカタログもアメリカ大使館によって編纂されたものである。<sup>(37)</sup> 本稿末尾に掲載した表は、『USISフィルム・カタログ』をもとに、これに含まれていないCIE映画を、阿部の研究、および筆者自身の占領軍資料の調査によって追加作成したものである。

CIE映画のテーマ別の傾向はどのようなものだったのだろうか。USISカタログにはテーマ別インデックスが付いているものの、百以上のテーマがある上に一つの映画が複数のテーマに重複掲載されているので、これだけではCIE映画のテーマ別傾向を把握することは困難である。そこでテーマを一七項目に単純化し、すべての映画をカテゴリ別に振り分けたのが下記の表である。映画が複数のテーマにわたる場合には、USISカタログにある映画のあらすじから判断して、最も関連が深いと思われるテーマ一つだけに当てはめた。占領終結以後に公開された映画については、輸入・選定等のプロセスは占領中に行われた可能性が高いという判断から、リストから削らない方針をとった。

アメリカ対日占領軍「CIE映画」

- (A) 日本製CIE映画…五四本
  - (B) アメリカ合衆国(文化・地理など)…四九本
  - (C) 国連・国際関係…四〇本
  - (D) 教育・図書館…三八本
  - (E) 民主主義と市民権…三八本
  - (F) アメリカ合衆国以外の国…三八本
  - (G) 産業・ビジネス…三三本
  - (H) 科学・技術・医学…二一本
  - (I) 農業・畜産・漁業・林業…一七本
  - (J) 子供・児童福祉…一六本
  - (K) 音楽・芸術…一六本
  - (L) 健康・衛生…一六本
  - (M) レクリエーション・スポーツ…一一本
  - (N) 女性…九本
  - (O) 英語教育…六本
  - (P) 労働…六本
  - (Q) 家族・家庭…三本
- 計…四一一本

全体として、アメリカという国の姿を伝える映画（文化・地理にとどまらず、民主主義的な社会・教育制度、産業や国民生活など）が圧倒的に多いことが特徴であるが、具体的な映画の内容分析については、後編に譲りたい。

- (1) CIE映画に関する日本国内の資料調査にあたっては、広島大学の柴静子先生、茨城大学の谷川建司先生、桃山学院大学の村秀之先生、東京国立近代美術館フィルムセンターの岡田秀則氏、横浜市立大学の小玉亮子先生、東宝株式会社の土田耕太郎氏、音響デザイナーの林穎四郎氏にご教示いただいた。ここに心より感謝の意を表する。また、この論文の元となった研究は、米国ミネソタ大学・レオナルド記念・映画研究フェローシップ、およびミネソタ大学・博士論文フェローシップの助成を受けた。この論文の英語版は、米国アメリカ学会（American Studies Association）二〇〇四年大会（アトランタ、二〇〇四年十一月）において発表予定である。なお論文の中で一部、以前に書いた英語論文『Imagined America in Occupied Japan: (Re-)Educational Films Shown by the U. S. Occupation Forces to the Japanese, 1948-1952,』*The Japanese Journal of American Studies*, no. 14 (2002) と内容が重複する部分があることをお断りする。

(2) 阿部彰『戦後地方教育制度成立過程の研究』（風間書房、一九八三年）、七二七頁。

(3) 『Documentary and Educational Film Attendance Report』(25 July 1951), RG331, GHQ/SCAP, CI & E, box 5088, file 15. 占領軍GHQ/SCAPの資料はすべてアメリカ国立公文書館所蔵。

(4) 中村秀之「占領下米國教育映画についての覚書―『映画教室』誌にみるナトコ（映写機）とCIE映画の需要について」*CineMagazine* no. 6 (<http://www.cmn.hs.h.kyoto-u.ac.jp/CMN6/nakamura.htm>) (二〇〇二年)。

(5) 阿部、六八五―七四二頁。

(6) 柴静子『戦後家庭科教育成立関係史料に関する調査研究―GHQ/SCAP文書並びに日本側史料の収集・整理と考察』（平成二二―一四年度・科学研究費補助金・研究成果報告書、二〇〇三年）。

- (7) 中村前掲論文。
- (8) 谷川建司「アメリカ映画と占領政策」(京都大学学術出版会、二〇〇二年)。
- (9) Jacqueline Jones, et al., *Created Equal: A Social and Political History of the United States* (New York: Longman, 2003), 760-761.
- (10) 戦争遂行に熱心に取り組んだリスラール・左翼芸術家の例は、画家のトマス・セントマン (Thomas Hart Benton)、『映画監督のフランク・キャブラ (Frank Capra)』詩人のアーチボルト・マクリーシユ (Archibald MacLeish) など、枚挙にいとまがない。アメリカ映画人の転向については、Lary May, *The Big Tomorrow: Hollywood and the Politics of the American Way* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 2000) が詳しい。
- (11) Clayton R. Koppes & Gregory D. Black, *Hollywood Goes to War: How Politics, Profits, and Propaganda Shaped World War II* (Los Angeles: University of California Press, 1987), 64; 谷川、九三頁の翻訳引用による。
- (12) 谷川、一〇一―一〇二頁。
- (13) 谷川、一五四―一六七頁。
- (14) 谷川、一七六頁。
- (15) Willard Van Dyke, *Steel Town*, no. 6 of *American Scene*, 35 min., 27 min., Office of War Information, 1944, アメリカ国立公文書館所蔵。
- (16) カルチュラル・フロントとマクリーシユの関係については、Michael Denning, *The Cultural Front: The Laboring of American Culture in the Twentieth Century* (New York: W. W. Norton & Co., 1998) を参照した。
- (17) Marlene Mayo, "Psychological Disarmament: American Wartime Planning for the Education and Re-education of Defeated Japan, 1943-1945," in Thomas Burkman, ed., *The Occupation of Japan: Educational and Social Reform* (The MacArthur Memorial, 1980), 57-61.
- (18) "Policy with Respect to Reorientation of the Japanese" (September 13, 1945), Records of SFE, microfilm, roll 4, 国立国会図書館蔵。

原版はメリーランド州カレッジ・パークのアメリカ国立公文書館所蔵。

説 (19) “Representation from OIC on Interdepartmental Ad Hoc Committee on Reorientation of the Japanese” (October 11, 1945), Records of SFE, microfilm, roll 4, 国立国会図書館。

論 (20) SWNCC 162 series, Records of SWNCC, microfilm, roll 14, 国立国会図書館。

(21) *Elaine Tyler May, Homeward Bound: American Families in the Cold War Era, Revised and Updated Edition* (Basic Books, 1999), 10-12. 写真は、米国議会図書館のウェブサイトで “The Work of Charles and Ray Eames: A Legacy of Invention” (<http://www.loc.gov/exhibits/eames/images/vc9636.jpg>) より転載。

(22) Charles K. Armstrong, “The Cultural Cold War in Korea, 1945-1950,” *The Journal of Asian Studies*, 62, no. 1 (February 2003), 74. 英語文献からの引用の際、日本語訳は他に注記が無ければ土屋による。

(23) 谷川、一三三三—一三三五頁。

(24) Armstrong, 79.

(25) 谷川、一五六頁。

(26) Division, Branch, Unit 等の日本語訳は谷川の例に従った。組織の変遷や人名については、佐藤秀夫「民間情報教育局の人事と機構」(昭和五十六年度、昭和五十八年度文部省科学研究費補助金総合研究A「連合国軍の対日教育政策に関する調査研究」報告書) (国立教育研究所、一九八四年) を参照した。

(27) “Political Information-Education Program,” and *Information Programs*, RG 331, GHQ/SCAP, CI&E, box 5305, file 12 and 15.

(28) Department of State, ed., *The Biographic Register* (1974).

(29) Motion Pictures Section, New York Field Office, Reorientation Branch, Office of the Secretary, Department of the Army, “Annual Report of Documentary Films Acquired from Outside Agencies for Shipment to Japan and the Ryukyus,” (26 June 1951), GHQ/SCAP, CI & E, box 5308, file 9.

- (30) "Conference with Mr. Sakurai of Shintocho." (10 April 1948), GHQ/SCAP, CI & E, box 5305, file 11.
- (31) 『東洋現像所社史』(一九九二年)、六八一―六九頁。
- (32) 土屋、I氏へのインタビュー(東京、二〇〇四年一月七日)。
- (33) "Conference with Mr. U. of Far East Lab." (21 April 1948), GHQ/SCAP, CI & E, box 5305, file 11.
- (34) 土屋、T氏へのインタビュー(東京、二〇〇四年一月七日)。
- (35) 『東洋現像所社史』、六八頁。I氏・S氏の記憶では、一六ミリ担当技術者は十名以下だった。
- (36) 土屋、I氏へのインタビュー(東京、二〇〇四年一月七日)。
- (37) Distribution Section, Motion Picture Branch, American Embassy Tokyo, *USIS Film Catalog for Japan 1953* (Tokyo, 1953). 15

資料の存在についてご教示いただいた谷川建司先生および中村秀之先生に感謝する。



写真1：徳島県内の山道をナトコ映写機をかついで歩く子供たち。1948年11月29日の日付がある。映写機の箱には「アメリカ政府所有」の文字がみられる。－メリーランド州カレッジ・パーク、米国国立公文書館所蔵。



写真2：ナトコ映写機を運び込む新潟県視聴覚ライブラリーの職員。－ベアトリス・デューク氏（故ドン・デューク夫人）所蔵。





写真3：日本人職員が操作するナトコ映写機を興味津々で見つめる子供たち。—ベアトリス・デューク氏（故ドン・デューク夫人）所蔵。

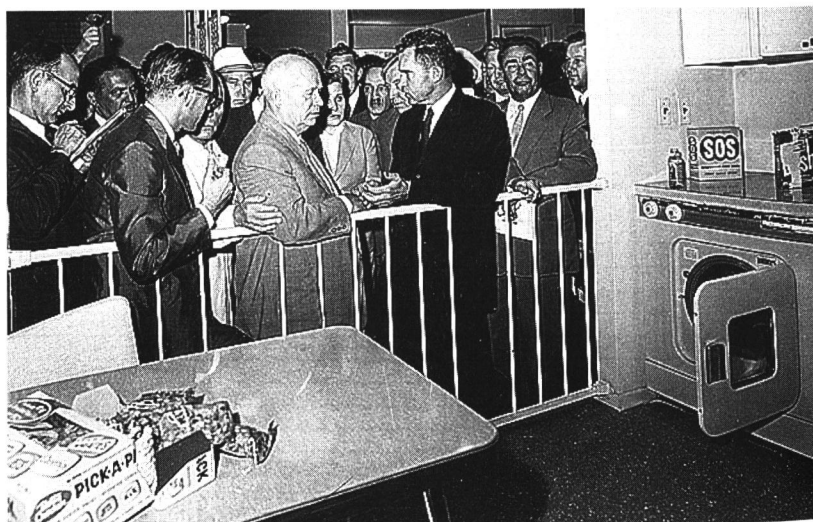


写真4：1959年モスクワにおけるアメリカ博覧会で、ニクソン副大統領とフルシチョフ首相との「台所論争」(Kitchen Debate)。—The U. S. Library of Congress, “The Work of Charles and Ray Eames: A Legacy of Invention” (<http://www.loc.gov/exhibits/eames/images/vc9636.jpg>)

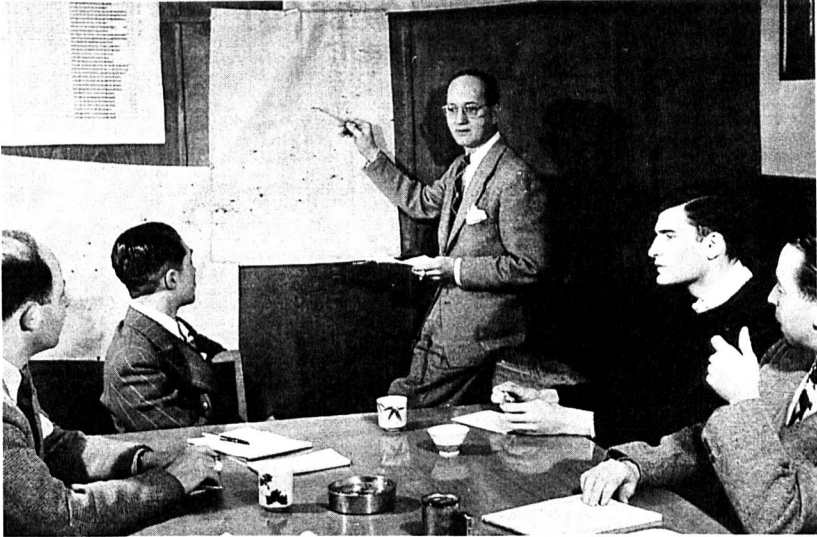


写真5：CIEの会議で日本地図を指しながらCIE映画の上映状況を説明するドン・デューク氏。地図に書き込まれた無数の小さな点は、恐らくCIE映画が上映された場所を示すものだろう。ーベアトリス・デューク氏（故ドン・デューク夫人）所蔵。

## CIE FILMS

CIE番号	タイトル	封切日	テーマ	リール数/分
1	トスカニーニ(Hymn of the Nations)	03/01/46	K	4rls, 28min
2	よりよき明日(A Better Tomorrow)	03/01/46	D	2rls, 23min
3	選挙当日(Tuesday in November)	03/01/46	E	2rls, 16min
4	勉学の自由(Freedom to Learn)	03/01/46	D	2rls, 19min
5	米国西北州(Northwest, USA)	03/01/46	B	2rls, 20min
6	電力と農園(Power and Land)	03/01/46	I	2rls, 19min
7	鋼の町(Steel Town)	03/01/46	G	2rls, 14min
8	飛来する疫病(Winged Scourge)	03/01/46	L	1rl, 10min
9	風邪を防ぐ樹木(Trees to Tame the Wind)	early46	I	1rl, 10min
10	アメリカの国立図書館(American National Library)	05/15/48	D	2rls, 21min
11	トロント交響楽団第一集(Tronto Symphony 1)	07/15/48	K	1rl, 9min
12	野球の打撃・投球指導(Baseball Instructions)	05/26/48	M	1rl, 11min
13	トロント交響楽団第二集(Tronto Symphony 2)	06/07/48	K	1rl, 11min
14	野球をやろう(Let's Play Baseball)	05/18/48	M	2rls, 18min
15	法律になるまで(How Laws Are Made)	06/15/48	E	1rls, 15min
16	白蠟の祭典(White Carnival)	03/15/48	M	1rl, 10min
17	山林を守る(Protecting the Forest)	05/14/48	B	1rl, 10min
18	みんなの学校(Everyone's School)	04/01/48	D	2rls, 16min
19	合衆国新西部(U.S. - The New West)	04/01/48	B	2rls, 20min
20	アメリカの首都(American National Capitol)	05/01/48	B	2rls, 14min
21	世界の食料問題(Our Food Problem)	05/05/48	C	2rls, 20min
22	アメリカの音楽(Music in America)	07/26/48	K	2rls, 17min
23	協同組合(Cooperative Association)	06/03/48	G	2rls, 17min
24	無限の力—石炭(Coal: Power Unlimited)	05/08/48	G	2rls, 18min
25	よい子の一日(Day at School, A)	07/18/48	D	2rls, 21min
26	水から力へ(From Water to Power)	05/22/48	H	2rls, 16min
27	英国刑事裁判(English Criminal Justice, The)	06/29/48	F	2rls, 20min
28	政府は公僕(Government, the Public Servant)	08/20/48	E	2rls, 20min
29	子供に遊び場を(Children's Supervised Play)	06/24/48	J	2rls, 14min
30	豪州の首都(Australian National Capitol)	07/30/48	F	2rls, 12min
31	火の化学(Chemistry of Fire)	06/10/48	H	5rls, 43min
32	医学への道(Medical Specialist)	07/09/48	H	4rls, 36min
33	ニュー・カナダ(New Canada)	08/16/48	F	1rl, 10min
34	明日の医学(Modern Medicine)	09/07/48	H	2rls, 14min
35	町も学校(Studying Our Town)	08/27/48	D	2rls, 23min
36	原子力(Atomic Power)	08/06/48	H	2rls, 17min
37	先生のお仕事(Teacher's Task)	04/01/49	D	2rls, 15min
38	廃墟より(Out of the Ruins)	01/22/48	C	2rls, 20min
39	火の用心(Beware of Fire)	06/17/48	A	2rls, 18min
40	リンカーントンネル(Story of Lincoln Tunnel)	12/24/48	G	1rl, 10min
41	運命の若芽(Seeds of Destiny)	01/15/48	C	2rls, 20min
42	国際連合憲章(Charter of the United Nations)	08/13/48	A	2rls, 19min
43	農業協同組合(Rural CO-OP)	08/27/48	I	2rls, 19min
44	合衆国テキサス州(U.S. - Texas)	08/17/48	B	1rl, 10min
45	合衆国ニューイングランド(US - New England)	10/22/48	B	2rls, 15min
46	合衆国新南部(U.S. - New South)	04/08/48	B	2rls, 15min
47	青白き騎士(Pale Horseman)	08/03/48	L	2rls, 13min
48	メキシコ(Mexico)	12/30/48	F	2rls, 12min
49	ブラジル(Brazil)	03/13/49	F	2rls, 18min
50	ニューヨーク港(Port of New York)	03/11/49	G	2rls, 16min
51	ロス・アンゼルス市(Los Angeles City)	02/11/49	B	1rls, 11min
52	合衆国アラスカ(U.S. - Alaska)	11/18/49	B	2rls, 16min

53	パナマ運河(Panama Canal)	12/16/49	F	2rls, 16min
54	合衆国五大湖地方(U.S. - Great Lakes)	01/13/50	G	2rls, 16min
55	イギリスの建築(Architecture of England)	10/22/48	F	2rls, 13min
56	イギリスの機関車(General Repair)	11/19/48	F	2rls, 21min
57	英国史(Beginning of History)	12/17/48	E	5rls, 47min
58	イギリスの郵便(Job in a Million)	01/21/49	E	2rls, 16min
59	消防学校(School of Fire Fighting)	08/12/49	H	4rls, 26min
60	地方自治の話(Story of Local Government, The)	10/15/48	E	2rls, 12min
61	組合の学校(Union's School)	09/24/48	P	2rls, 12min
62	人民の憲章(People's Charter)	11/05/48	E	2rls, 16min
63	食生活(Our Eating Life)	09/14/48	L	2rls, 18min
64	将来の設計(Design for the Future)	08/31/48	G	2rls, 18min
65	青少年赤十字(Junior Red Cross)	05/20/49	D	2rls, 16min
66	ウルグアイ共和国(Republic of Uruguay)	05/06/49	F	2rls, 17min
67	ペルー共和国(Republic of Peru)	01/10/49	F	2rls, 21min
68	アルゼンチン(Argentine)	11/16/48	F	3rls, 16min
69	新しい教育(New Education)	11/12/48	D	1rl, 9min
70	人と機械(Men and Machine)	05/02/50	G	2rls, 16min
71	アメリカ国立公園(American National Parks)	05/12/50	B	2rls, 18min
72	サンフランシスコ市(San Francisco City)	12/03/48	B	2rls, 17min
73	大学繁盛記(Campus Boom)	12/19/48	D	2rls, 12min
74	自由列車(Freedom Train: CIE Film Sketch #1)	11/19/48	E	1rl, 9min
75	労働組合の成り立ち(Why Labor Unions)	10/19/48	P	1rl, 10min
76	明日への若人(Men of Tomorrow - YMCA)	08/26/49	D	3rls, 23min
77	ロックフェラー・センター(Rockefeller Center)	06/02/50	B	2rls, 15min
78	明日の市民たち(Leaders of Tomorrow)	07/03/49	A	2rls, 18min
79	やさしきネリー(Nellie Was A Lady: Foster Melodies, vol	03/25/49	K	2rls, 14min
80	美しき夢路(Come Where My Love Lies Dreaming: Foster M	05/27/49	K	2rls, 15min
81	髪美しきジニー(Jeannie With the Light Brown Hair: Fos	04/29/49	K	2rls, 15min
82	ゆめ路より(Beautiful Dreamer: Foster Melodies, vol. 5	06/24/49	K	2rls, 16min
83	アメリカの女子大学(American Women's College, An)	01/28/48	D	2rls, 21min
84	アメリカの牧畜(American Stock Raising)	09/09/49	I	2rls, 21min
85	アメリカ婦人は語る(American Woman Speaks: CIE Film Sket	12/17/49	N	1rl, 10min
86	結核の自宅療法(Home Care of Tuberculosis)	11/26/48	L	1rl, 11min
87	おおすザンナ(Oh Susanna: Foster Melodies, vol. 1)	02/25/49	K	2rls, 15min
88	イギリス点描(Sketches of Britain: CIE Film Sketch #3)	01/21/49	F	1rl, 10min
89	鉄道博覧会(Railway Exhibition: CIE Film Sketch #4)	01/14/49	G	1rl, 10min
90	イギリスのトピックス(Topics of Britain: CIE Film Sketch #	03/15/49	F	1rl, 9min
91	フィリピン共和国(Philippine Republic)	04/11/50	F	
92	グロスターの人々(Men of Gloucester)	05/12/50	I	2rls, 22min
93	農業共進会(Country Fair)	08/12/49	I	2rls, 20min
94	科学工業博物館(Museum of Science and Industry)	07/08/49	H	2rls, 12min
95	結核は治る(Defeat Tuberculosis)	01/07/49	L	1rl, 10min
96	会議のもち方(How to Hold a Meeting)	03/26/49	A	3rls, 30min
97	スコットランドの海と山(The Mountains and Seas of Scotland	04/29/49	F	2rls, 11min
98	レッドウッド・サガ(Redwood Saga)	02/18/49	I	1rl, 11min
99	町の医者(Doctor, The)	04/15/49	E	2rls, 14min
100	伸びゆく婦人(Progress of the Japanese Women)	09/02/49	A	2rls, 23min
101	スコットランドヤード(Scotland Yard)	02/04/49	F	2rls, 20min
102	青信号(Clear Track Ahead)	03/18/49	G	3rls, 28min
103	ニュージーランドのトピックス(Topics of New Zealand: CIE Fil	04/12/49	F	1rl, 6min
104	世界ニュース(CIE World News Headlines 1948)	01/14/49	C	2rls, 19min
105	世界ニュースフラッシュ(CIE World News Flash 1948)	01/28/49	C	1rl, 10min

アメリカ対日占領軍「CIE映画」

106	青いリボンと金杯(Blue Ribbon and Gold Cup: CIE Film Sket	05/17/49	F	1rl, 8min
107	国連祭(United Nations' Week Festival: CIE Film Sket	05/27/49	C	1rl, 9min
108	オレンジのクック諸島(Cook Island Oranges: CIE Film Sket	06/17/49	F	1rl, 7min
109	科学する女性(Lady of Science)	03/04/49	A	18min
110	ニュージーランドのスポーツ(Winter Sports: CIE Film Sketch	07/15/49	M	10min
111	働くものの健康(Prevent Silicosis)	10/14/49	L	1rl, 12min
112	コロンビア共和国(Republic of Columbia, The)	10/07/49	F	2rls, 21min
113	打撃王(Baseball Swing King)	05/06/49	M	3rls, 25min
114	ねずみの防止(Rodent Control)	05/31/49	L	17min
115	保健所と体育館(Recreational Health Center)	01/14/49	L	15min
116	英国規格基準局(Precise Measurement for Engineers)	01/17/49	F	23min
117	英国海軍水路部(Chartering the Seas)	07/15/49	F	17min
118	国際芸術祭(International Arts Festival: CIE Film Ske	08/19/49	K	1rl, 10min
119	イギリスの話題(Rhemes from Britain: CIE Film Sketch #1	09/16/49	F	1rl, 10min
120	イギリスは語る(The British Speaks: CIE Film Sketch #18	10/21/49	F	1rl, 11min
121	ジラード物語(Girard Story)	07/22/49	J	1rl, 10min
122	水は友か敵か(Water, Friend or Foe)	03/03/50	L	1rl, 9min
123	公衆衛生(Public Sanitation)	05/13/49	A	2rls, 16min
124	Increased Production for Rehabilitation	キャンセル	G	
125	アメリカのトピックス(Topics of America: CIE Film Sketch #	06/24/49	B	1rl, 11min
126	アメリカの話題(Rhemes from the U.S.: CIE Film Sketch #	07/29/49	B	1rl, 9min
127	クリーヴランド市(Cleveland City)	09/23/49	B	2rls, 18min
128	ケア物質の話(Care Story, The)	07/29/49	A	2rls, 13min
129	スポーツ・レビュー(Sports Revue: CIE Film Sketch #15)	08/26/49	M	1rl, 12min
130	北アイルランド(Northern Ireland)	07/26/49	F	
131	新しい保健所(Model Health Center)	08/05/49	A	2rls, 20min
132	休暇のスポーツ(Vacation Sports: CIE Film Sketch #17)	09/30/49	M	1rl, 10min
133	発表できない話(Story That Couldn't Be Printed, The)	11/10/49	E	1rl, 11min
134	海老の町(Losbter Town)	12/02/49	I	2rls, 19min
135	宝の家(Treasure House)	12/23/49	H	2rls, 15min
136	深夜の汽笛(Whistle in the Night)	12/09/49	G	2rls, 17min
137	ルイジアナ物語(Louisiana Story)	10/26/51	H	9rls, 79min
138	腰のまがる話(Bent With the Years)	09/02/49	A	2rls, 20min
139	カリフォルニア州ジュニア交響楽団(California Junior Symphon	11/04/49	K	2rls, 17min
140	スポーツ黄金時代(Sports' Golden Age)	02/24/50	M	2rls, 17min
141	北地のナヌック(Nanook of the North)	10/12/51	F	6rls, 50min
142	武装のない国境(Border Without Bayonets)	02/03/50	E	2rls, 16min
143	近代的な道路(Modern Highway)	08/18/50	G	1rl
144	雨だれ坊やの冒険(Adventure of Junior Raindrop)	05/16/52	H	1rl 8min
145	アメリカの再発見(Re-discovery of America)	01/20/50	C	1rl, 11min
146	アメリカのメモ(Memos from America: CIE Film Sketch #21)	01/20/50	B	1rl, 10min
147	漁業生産組合(Fishing Cooperatives)	01/06/50	A	2rls, 22min
148	郵便を守る人々(Guardians of the Mail)	08/04/50	G	2rls, 18min
149	新しい交通(New Traffic)	11/26/49	A	2rls, 19min
150	ホワイト・ハウス(White House)	05/31/50	E	2rls, 19min
151	火災を防ぐ人々(Fire Fighters)	04/28/50	H	2rls, 17min
152	アメリカの住宅問題(American Housing Problem)	12/30/49	E	1rl, 8min
153	この妻の願いを(Housewife's Desire)	11/28/49	A	
154	アメリカ点描(Glimpses of America: CIE Film Sketch #19)	12/02/49	B	1rl, 10min
155	空輸の話(Story of the Airlift, The)	12/30/49	C	3rls, 27min
156	インターナショナル・ハウス(International House)	02/10/50	D	1rl, 10min
157	アメリカ郷土舞踊祭 第一集(American Folk Festival No. 1)	01/27/50	B	1rl, 8min
158	青少年企業(Junior Enterprise: CIE Film Sketch #23)	02/17/50	G	1rl, 8min

159	アメリカ郷土舞踊祭 第二集(American Folk Festival No. 2)	03/17/50	B	1rl, 9min
160	演劇の世界(Theatrical World, The)	04/14/50	K	2rls, 15min
161	ニューヨーク市(This Is New York)	03/24/50	B	2rls, 22min
162	ニューヨーク市の警官(Policeman of New York, The)	09/22/50	E	1rl, 11min
163	ライフ誌の夏のキャンプ(Life's Summer Camps)	05/05/50	J	2rls, 13min
164	国を支える三つの柱(Three Pillars of the Government)	06/09/50	A	2rls, 14min
165	地方新聞の話(Story of the Local Newspaper)	09/29/50	E	3rls
166	議事の進め方(Using Parliamentary Procedures)	09/22/50	A	2rls, 21min
167	新しい警察(New Police, The)	09/08/50	A	3rls, 32min
168	タミーちゃんの日(Little Tommy's Day)	01/23/51	J	2rls, 15min
169	CIE図書館(CIE Information Center)	06/11/50	A	
170	美しきアメリカ(America the Beautiful)	09/14/51	B	2rls, 19min
171	プエブロの子供達(Pueblo Boy)	05/19/50	B	2rls, 24min
172	働く少年の楽園(Burroughs Newsboys' Foundation)	04/07/50	J	1rl, 11min
173	アメリカの近況(Latest from America, The: CIE Film Sket	04/07/50	B	1rl, 11min
174	アメリカ展望(Views of America: CIE Film Sketch #26)	04/21/50	B	1rl, 11min
175	子供の動物園(Children's Zoo: CIE Film Sketch #27)	05/05/50	J	1rl, 10min
176	浮かぶ劇場(Floating Theater)	04/21/50	D	1rl, 9min
177	新聞の自由(Freedom of the Press)	05/19/50	E	2rls, 17min
178	組立式住宅(Prefabricated Housing)	12/29/50	G	1rl, 8min
179	アメリカの田舎の郵便配達(American Country Postman)	05/12/50	E	1rl, 10min
180	オクラホマ州タルサ(Tulsa, Oklahoma)	01/26/51	B	2rls, 19min
181	アメリカの村の雑貨屋(American Village Storekeeper)	07/07/50	E	2rls, 19min
182	テレビジョン教室(Television Workshop: CIE Film Sketch	05/19/50	G	1rl, 10min
183	ハドソン河遊覧船(Hudson River Excursion)	01/16/50	B	1rl, 10min
184	カウボーイ祭り(Cowboy Festival)	07/28/50	B	1rl, 11min
185	イギリスの炭坑業(English Coal Mining)	10/27/50	F	5rls
186	工業安全設備(Industrial Safety Devices)	06/30/50	G	1rl, 7min
187	心に描く画(Picture in Your Mind)	04/27/51	E	2rls, 16min
188	こども議会(Children's Diet)	05/19/50	A	2rls, 19min
189	わが街の出来事(it Happened in Our Town)	06/30/50	A	2rls, 15min
190	アメリカ博覧会の日(Day At the American Fair, A)	09/29/50	A	3rls, 34min
191	働くものの苦情処理(Workers' Grievance Procedure)	09/01/50	A	3rls, 34min
192	公民館(Citizen's Public Hall)	12/29/50	A	3rls, 32min
193	ニューヨーク市の消防(New York Fire Department: CIE Film	01/16/50	H	1rl, 9min
194	格子なき図書館(Libraries Without Bars)	12/05/50	A	2rls, 22min
195	ニュージーランドの話題(Topics from New Zealand: CIE Film	07/14/50	F	
196	働くものの権利(Rights of the Worker)	11/17/50	A	2rls, 20min
197	何にでもなる木(Tree of Wealth)	08/04/50	I	1rl
198	農村の生活改善(Better Rural Homes)	01/12/51	A	2rls, 20min
199	学校の改革(Fight for Better Schools, The)	10/06/50	D	2rls, 20min
200	いとこ子らのために(Children's Guardian)	10/20/50	A	4rls, 40min
201	再起の歩み(They Walk Again)	07/28/50	J	1rl, 10min
202	農業ホーム・プロジェクト(Agricultural Home Project)	03/09/51	A	3rls, 31min
203	アメリカの警官(American Cop, The)	09/15/50	E	2rls, 18min
204	知識の宝庫(Wealth Within Books)	05/30/51	D	2rls, 15min
205	公民教室(Civics Workshop)	02/23/51	E	2rls, 20min
206	少年野球リーグ(Boys' Baseball League)	07/14/50	M	2rls, 19min
207	農場の春(Spring on the Farm)	01/29/51	B	1rl, 11min
208	農場の夏(Summer on the Farm)	07/20/51	B	1rl, 10min
209	農場の秋(Autumn on the Farm)	07/20/51	B	1rl, 10min
210	農場の冬(Winter on the Farm)	08/17/51	B	1rl, 11min
211	明るい家庭生活(For a Bright Home Life)	10/20/50	A	2rls, 21min

アメリカ対日占領軍「CIE映画」

212	ぼくらのゆめ(Our Dream)	06/02/50	A	2rls, 22min
213	スクエアダンスを踊ろう(Let's Squire Dance)	07/21/50	A	2rls, 14min
214	漁る人々(Men Who Fish)	12/15/50	A	3rls, 25min
215	ベーシック・イングリッシュ1(Basic English No. 1)	08/17/50	O	1rl, 11min
216	ベーシック・イングリッシュ2(Basic English No. 2)	08/18/50	O	1rl, 8min
217	ベーシック・イングリッシュ3(Basic English No. 3)	08/25/50	O	1rl, 12min
218	ベーシック・イングリッシュ4(Basic English No. 4)	09/01/50	O	1rl, 12min
219	ベーシック・イングリッシュ5(Basic English No. 5)	09/08/50	O	1rl, 10min
220	ベーシック・イングリッシュ6(Basic English No. 6)	09/15/50	O	1rl, 8min
221	書物だけでなく(Not By Books Alone)	10/26/51	D	2rls, 21min
222	ストレプトマイシン(Streptomycin)	11/10/50	H	1rl, 10min
223	田舎の店(Country Store)	11/24/50	E	2rls, 19min
224	アメリカのサラリーマン(White Collar Worker)	02/02/51	Q	2rls, 21min
225	働くアメリカ婦人(American Working Women)	12/22/50	N	2rls, 19min
226	アメリカの自動車工(Auto Worker in Detroit)	12/08/50	E	2rls, 21min
227	損をするのは誰だ(Who's the Loser?)	10/13/50	A	1rl
228	渡米議員団の州議会訪問(Japanese Diet Members Visit an	08/17/50	E	2rls, 17min
229	渡米議員団のワシントン視察(Japanese Diet Members Tour Wa	08/25/50	E	2rls, 19min
230	渡米婦人団のクワイヴランド市訪問(Japanese Women Leaders Vi	10/27/50	N	1rl, 10min
231	高崎での話(Takasaki Story)	09/28/51	A	2rls, 23min
232	友達への手紙(Letter To A Friend)	07/27/51	A	2rls, 20min
233	デモクラシーの一例(Example of Democracy, An)	06/29/51	E	1rl, 11min
234	イソップ物語(Aesop's Fables)	07/06/51	J	1rl, 11min
235	アメリカ自然科学博物館(American Museum of Natural Histor	03/23/51	H	2rls, 16min
236	U.S. and he Fight for Food	キャンセル		
237	露進するスウェーデン(Sweden's East Coast)	09/12/50	F	
238	侵略に答える国連(United Nations Answers Aggression)	08/15/50	C	1rl, 9min
239	健康は清潔から(Cleanliness Brings Health)	07/25/52	L	1rl, 9min
240	病菌の旅(How Disease Travels)	09/12/52	L	1rl, 10min
241	育児と栄養(Infant Care in Feeding)	10/31/52	L	1rl, 9min
242	病菌を運びまわる昆虫(Insects as Carriers of Disease)	08/08/52	L	1rl, 9min
243	結核(Tuberculosis)	09/26/52	L	1rl, 10min
244	境界線(The Bordery Lines)	?	C	
245	国連と世界の紛争(United Nations and World Disputes)	09/22/50	C	2rls, 21min
246	ユネスコと私たち(UNESCO and Japan)	02/01/52	A	2rls, 25min
247	国連本部の誕生(United Nations Finds a Home)	10/13/50	C	3rls, 33min
248	共同募金(Community Chest)	09/29/50	E	2rls, 21min
249	海はわが故郷(Sea - My Native Land, The)	10/18/50	C	1rl, 11min
250	婦人と共同体(Women and the Community)	02/09/51	N	2rls, 17min
251	アメリカの大学生活(Campus Life in America)	01/19/51	D	4rls, 43min
252	デモクラシーの日記(Democracy's Diary)	01/05/51	G	2rls, 16min
253	ソ連はこう考える(As Russia Sees It)	10/27/50	C	2rls, 16min
254	町の物語(Town, The)	03/16/51	E	1rl, 11min
255	日曜日のニューヨーク市(Sunday in New York)	06/27/52	B	1rl, 9min
256	アメリカ南部の民謡(Folk Songs of the South)	08/01/52	K	2rls, 21min
257	余暇を生かして(Creative Leisure)	03/03/51	E	2rls, 20min
258	問題を解決する町(Town Solves a Problem, A)	02/16/51	E	2rls, 16min
259	児童博物館(Museum For School Children)	04/27/51	J	2rls, 18min
260	アメリカのサッグ・ハーバー町(Sag Harbor, USA)	05/30/52	G	1rl, 10min
261	渡米婦人団のオハイオ州訪問(Japanese Women Visit Ohio, US	11/14/50	N	
262	国連旗の下に(Under the United Nations Flag)	10/20/50	A	2rls, 15min
263	アメリカ演劇をたずねて(Local Drama: CIE Film Sketch #31)	03/16/51	B	1rl, 8min
264	自由のための戦い(Fight For Freedom)	02/06/53	C	2rls, 19min

265	摩天楼の曲芸師(Window Cleaner, The)	02/23/51	B	1rl, 6min
266	夢の設計者(Draftsmen of Dreams)	04/13/51	G	2rls, 16min
267	16ミリ映画について(Facts About 16mm Film)	12/08/50	H	1rl, 10min
268	国連スクリーン・マガジン第一号(UN Screen Magazine No. 1)	01/26/51	C	2rls, 16min
269	ニューイングランドの農夫(New English Farmer)	07/11/52	I	1rl, 11min
270	生活水準向上の鍵(Productivity - Key to Plenty)	04/03/51	G	
271	モーゼスおばあさん(Grandma Moses)	04/04/52	K	2rls, 22min
272	スイス(Switzerland)	05/11/51	F	
273	青少年の補導(Youth Guidance)	03/30/51	E	2rls, 18min
274	世論(Public Opinion)	04/27/51	E	1rl, 11min
275	三匹の子猫(Three Little Kittens)	05/04/51	J	1rl, 10min
276	兎と亀(Hare and the Tortoise, The)	05/18/51	J	1rl, 10min
277	小兎の冒険(Adventures of Bunny Rabbit)	06/01/51	J	1rl, 10min
278	アメリカのバスの運転手(Bus Driver)	05/25/51	G	1rl, 11min
279	アメリカの消防(Fireman, The)	06/08/51	H	1rl, 11min
280	アメリカの郵便屋さん(Mailman, The)	05/11/51	G	1rl, 11min
281	ティーチャー・アズ・アン・オブザーバー・アンド・ガイド(Teacher As an Observer and Guide)	01/10/51	D	2rls, 22min
282	ラーニング・トゥー・アンダースタンド・チルドレン(Learning to Understand Children)	01/10/51	J	
283	ブローダー・コンセプト・オブ・メソッド(Broader Concept of Methodology)	01/10/51	D	3rls, 31min
284	ウィルソン哑学校(The Wilson Deaf School)	01/09/51	D	
285	子供の教育を誰にまかせるか(Who Will Teach Your Child)	01/09/51	D	
286	ラーニング・スルー・ユア・ティヴ・ブラニング(Learning Through Your Own Experiences)	01/10/51	D	2rls, 19min
287	一番安全な道(Safest Way, The)	10/05/51	J	2rls, 17min
288	アメリカの少年クラブ(Boys' Club in America)	01/24/51	D	
289	YWCAの話(STORY OF YWCA, The)	04/06/51	N	1rl, 11min
290	わたしの大地(This Land Is Mine)	07/13/51	A	2rls, 17min
291	お金の働き(Money at Work)	05/18/51	G	2rls, 16min
292	エッセックスの船大工(Shipbuilder of Essex)	09/29/52	G	2rls, 20min
293	国際自由労連・ロンドン大会(International Free Trade Union Congress, London)	05/25/51	G	
294	接近する世界(Expanding World Relations)	02/01/52	C	1rl, 11min
295	アメリカ短信(Briefs From America: CIE Film Sketch #32)	04/20/51	B	1rl, 10min
296	ニュージランドの秘境を探る(Exploring the Mysteries of New Zealand)	01/31/51	F	
297	イギリス短信(Briefs from Britain: CIE Film Sketch #34)	02/20/51	F	
298	アメリカ寸描(Views of America: CIE Film Sketch #35)	07/13/51	B	1rl, 9min
299	正義の殿堂(Citadels of Justice)	08/31/51	A	2rls, 21min
300	新しい眼、新しい耳(New Eyes, New Ears)	08/17/51	A	
301	アメリカ雑記(Notes From America: CIE Film Sketch #36)	08/10/51	B	1rl, 10min
302	アメリカだより(News From America: CIE Film Sketch #37)	09/07/51	B	1rl, 10min
303	共産主義の足跡(Communist Footprints)	03/09/51	C	2rls, 13min
304	蔬菜農園(Truck Farm)	05/02/52	I	2rls, 20min
305	1949年ワールド・シリーズ(World Series of 1949)	05/04/51	M	4rls, 36min
307	組合と共同社会(Union and Community)	08/31/51	P	2rls, 17min
308	新しい隣人(New Neighbors)	04/11/52	I	1rl, 9min
309	町のなりたち(U.S. Community, A)	06/01/51	E	2rls, 21min
310	水の恵み(Water for Dry Land)	06/22/51	G	2rls, 19min
311	森林王国(Lumber States, The)	07/06/51	I	2rls, 21min
312	家畜王国(Cattle and the Corn Belt)	07/13/51	I	2rls, 20min
313	アメリカの公共図書館(Free Reading for All)	11/02/50	D	2rls, 22min
314	自由のために(People's Response)	07/08/51	C	1rl, 11min
315	世論と政治活動(Public Opinion and Political Action)	06/15/51	E	2rls, 21min
316	平和への提携(Partnership For Peace)	04/20/51	C	2rls, 17min
317	視聴覚教材と教育(Audio-Visual Aids to Learning)	08/10/51	D	2rls, 14min
318	エクアドルの地震(Earthquake in Ecuador: UN Screen Magazine)	06/15/51	C	2rls, 15min



アメリカ対日占領軍「CIE映画」

319	世界の大学(University of the World (UN Screen Magazi	07/27/51	C	1rl, 11min
320	アメリカだより(News From America: USIS Film Sketch #38)	04/25/52	B	1rl, 10min
321	アメリカだより(News From America: USIS Film Sketch #39)	05/23/52	B	1rl, 11min
322	美術学生連盟(Art Students League)	10/12/51	D	2rls, 17min
323	アマゾン(Amazone Awakens, The)	06/13/52	F	4rls, 37min
324	成人教育(Adult Education)	09/07/51	D	2rls, 19min
327	学びつつ働く(Working Through College)	08/24/51	D	2rls, 17min
329	エスキモー(Eskimo Hunters)	11/30/51	B	2rls, 21min
330	バッファロー市(Buffalo, USA)	11/09/51	B	2rls, 20min
331	ノールウェー(Norway Farmer-Fisherman)	11/16/51	F	2rls, 20min
332	西欧の工業地帯(Industrian Western Europe)	08/17/51	F	2rls, 21min
333	アドーピの村(Adobe Village)	08/24/51	F	2rls, 19min
334	先生になるまで(Preparation of Teachers)	07/04/52	D	2rls, 20min
335	アメリカだより(News From America: USIS Film Sketch #40)	06/20/52	B	1rl, 10min
336	アメリカだより(News From America: USIS Film Sketch #41)	07/18/52	B	1rl, 9min
337	アメリカだより(News From America: USIS Film Sketch #42)	08/15/52	B	1rl, 9min
338	アメリカだより(News From America: USIS Film Sketch #43)	09/19/52	B	1rl, 10min
340	1950年ワールド・シリーズ(World Series of 1950)	09/21/51	M	3rls, 31min
341	農家の銀行家(Banker for the Farmer)	12/21/51	G	2rls, 20min
342	国連スクリーン・マガジン第五号(UN Screen Magazine No. 5)	04/19/51	C	1rl, 11min
343	国連スクリーン・マガジン第六号(UN Screen Magazine No. 6)	12/14/51	C	1rl, 11min
344	農業改良普及員(Country Agent)	08/22/52	I	2rls, 17min
345	平和への意思(Will for Peace, The)	09/18/51	C	3rls, 33min
346	ある平和運動(Education for Peace)	02/22/52	E	1rl, 11min
349	十二指腸虫(Hookworm)	11/14/52	L	1rl, 10min
350	なぜ朝鮮へ?(Why Korea?)	01/11/52	C	3rls, 30min
351	保健婦の手紙(Pulic Health Nurse)	11/09/51	A	2rls, 18min
352	社会を教室に(World in a Schoolroom)	01/11/52	D	2rls, 17min
353	国連記念祭(UN Anniversary: CIE News Magazine No. 35)	11/30/51	C	1rl, 10min
354	New Rural School	12/28/51	D	2rls, 19min
355	朝鮮での一年(One Year in Korea)	11/02/51	C	2rls, 21min
356	一歩前進(Step Forward)	01/04/52	A	2rls, 20min
357	氷山を追って(International Ice Patrol)	09/05/52	H	2rls, 11min
358	TVAの町(TVA Town)	04/11/52	G	3rls, 30min
359	CIEスクリーン・マガジン第1集(CIE Screen Magazine No. 1)	09/28/51	A	1rl, 11min
360	火事はどこだ?(Where's the Fire?)	12/28/51	E	2rls, 16min
361	値段と品物(Price and Quality)	11/30/51	A	2rls, 22min
362	永遠の戦い(Eternal Fight)	10/19/51	C	2rls, 22min
363	ある村の歩み(Changing Village)	02/15/52	A	2rls, 22min
364	実験学校(Experimental Elementary School)	04/25/52	D	2rls, 16min
365	平和への道(Road to Peace, The)	09/14/51	C	1rl, 8min
367	子供の美術学校(Children's Art School: CIE Film Sketch	10/24/52	D	1rl, 10min
368	今日のスイス(Switzerland Today)	01/04/52	F	2rls, 18min
369	国連スクリーン・マガジン第八号(UN Screen Magazine No. 8)	03/28/52	C	1rl, 11min
370	空の威力(Fight Plan for Freedom)	01/25/52	C	2rls, 19min
371	わが子はめくら(My Child Is Blind)	01/25/52	J	2rls, 21min
372	暴風圏(Hurricane Circuit)	10/17/52	H	3rls, 23min
373	友情のかがりび(Torch of Friendship)	12/07/51	A	1rl, 10min
374	放送のけいこ(Rehearsal)	05/02/52	G	3rls, 25min
375	交換学生的一年(Year in America)	11/16/51	D	3rls, 30min
376	夏の美術学校(Summer Art Schools: USIS Film Sketch No	11/21/52	B	1rl, 10min
377	音楽の森(Tanglewood)	10/03/52	K	2rls, 21min
378	電話の時間(Telephone Hour, The)	04/18/52	H	3rls, 24min

379	日本のユネスコ加入(Japan Joins UNESCO)	12/21/52	C	1rl, 11min
380	16ミリ映写について(Facts About 16mm Projection)	12/07/51	H	1rl, 11min
381	労資の協調(Working Together)	02/22/52	P	3rls, 23min
382	バッハ音楽のひとつ(Time for Bach, A)	05/09/52	K	3rls, 25min
383	町の図書館(Small Town Library)	06/06/52	D	1rl, 10min
384	シヤトル日本貿易博覧会(Japanese Trade Fair)	01/18/52	G	1rl, 9min
385	アメリカへの手引(Introduction to America)	02/08/52	D	2rls, 22min
386	国際連合の意義(Meaning of the United Nations, The)	02/08/52	A	2rls, 19min
387	エコソクの話(Ecosoc & Its Sub-Agencies)	03/14/52	C	2rls, 20min
388	前進する社会(Social Change in a Democracy)	02/29/52	E	3rls, 29min
389	図書館員(Librarian, The)	04/18/52	D	1rl, 10min
390	人間の権利(Human Rights)	02/29/52	A	3rls, 26min
391	世界のつどい(Town Meeting of the World)	05/07/52	C	2rls, 14min
392	よい隣人(Social Worker, The)	02/29/52	N	3rls, 28min
393	民間放送局(Independent Radio Station)	03/07/52	E	2rls, 18min
394	キモノ海を渡る(Kimono Crosses the Seas, The: CIE Scree	03/21/52	A	1rl, 10min
395	家族(Family, The)	03/07/52	Q	2rls, 18min
396	アメリカの印象 第二集(Impressions of America No. 2)	03/14/52	A	2rls, 17min
397	国連スクリーン・マガジン第七号(UN Screen Magazine No. 7)	02/15/52	C	1rl, 10min
398	公衆道徳(Individual Rights in Public)	03/21/52	A	2rls, 20min
399	ディスカッションの手引き(Discussion Techniques)	04/04/52	A	3rls, 23min
401	赤の陰謀(Communist Conspiracy, The)	03/28/52	A	2rls, 21min
402	戦争花嫁(Japanese Bride in America)	03/21/52	N	4rls, 31min
403	病菌はどこにあるか?(Where Are the Germs?)	03/28/52	A	2rls, 18min
404	いなご(Locust: USIS News Magazine No. 36)	11/07/52	C	1rl, 8min
405	新しいかどで(New Beginning, The)	04/11/52	H	4rls, 34min
406	労働組合員教育(Education Within Labor Unions)	04/04/52	A	2rls, 17min
?	Women's Role in Civic Affairs	?	N	
501	自由の国々の握手(Partners for Freedom)	02/06/53	C	1rl, 10min
502	手は語る(With These Hands)	02/27/53	P	6rls, 49min
503	若い市民(Junior Chamber of Commerce)	01/30/53	J	2rls, 19min
504	世界青年会議(World Assembly of Youth)	12/26/52	C	4rls, 33min
505	帰農する工員(Factory Worker Turns Farmer)	01/16/53	I	3rls, 24min
507	アメリカの復活祭(Easter in USA)	02/27/53	B	1rl, 9min
509	ハイキング・コース(Appalachian Trail, The)	02/20/53	B	1rl, 9min
510	平和への計画(Plan for Peace)	3/13/53	C	1rl, 10min
513	団体交渉(Union Local, A)	01/02/53	P	3rls, 30min
514	アメリカの農業大学(Agricultural College)	02/13/53	I	2rls, 16min
521	トレーラー201(Trailer 201)	01/09/53	G	4rls, 40min
522	アラン少年(Boy Named Alan, A)	12/19/52	Q	1rl, 10min
523	千古の呪い(Ancient Curse, The)	11/14/52	L	5rls, 44min
524	南極の秘境(Secret Land)	11/21/52	F	8rls, 78min